

第18回 大賞(金の星賞)受賞作品

「セミのぬけがら」

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎一年 山木 晴香



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

大賞 <金の星賞>

『セミのぬけがら』

大阪府 大阪教育大学附属高等学校(天王寺校舎)一年 山木晴香

思わず悲鳴をあげていた。

バツと田の前に出された茶色でカサカサしたそれは、大悟の白い手によつてさらに気味が悪かった。

セミのぬけがら。

最後に見たのはいつだつたっけ。もう、夏かあ……。そんなことを考えながら、まじまじと見てみる。

「あれ？ 理音^{りおん}、これ、嫌いじゃないの？」

不思議そうに大きな田を丸くして、わたしを見つめる。ちょっと、おもしろくなさそう。

「そりや、人間、急に田の前になんか出てきたら、驚くでしょ」

「ふーん……。理音は女の子だから、こういうの、嫌いだと思ってた」

「そんなことないよ。こうなる前は兄さんに連れ出されてよくセミ取りしに行つたし」

もう、そんなことできないけどね。そんなセリフとともに、自嘲的^{じちようてき}な笑みをもらす。

今年の春、わたしは中学校の制服を一度も着ることなく、入院することになつた。今は、七月の初め。完全にセミの季節だ。

となりにいる大悟は、小学四年生から。わたしとは、違う病氣で。大悟は心臓が悪いんだけど、わたしはどうやら血液の病氣らしい。わたしがショックを受けると思ったのか、両親が病名を教えてくれなかつたのだ。

病院内の学校で、二人だけが同じ年だったので、仲良くなつた。でも、大悟は病氣ではないんじゃないかと思うくらい、元気だった。だって、

「でもこれ、どうしたの？」

「父さんと、あの山にとりに行つたの」





つて」とがでかねりひだり。わたしがとくれば、最近一回田の治療が終わってほっとしてこるといふ。もうあぐー一回田の治療もはじまるから、外に出るなんて、もつての他だった。

「いいなあ……」

わたしが小さな声でそつともりすと、大悟は静かに笑い、個室の病室、わたしが寝ているベッド近くの大窓のサッシに、セミのぬけがらを置いた。

外のセミの鳴くけたたましい声にまぎれて、ぬけがらが、カサツと音を立てた。

それからしづらげ、まともに会うことはできなかつた。一回田の治療がはじまり、わたしの体調がとてもなく悪くなつたからだ。点滴のチューブをつけ、髪の毛が抜けた姿を見てほしくなかつたし、何より治療のせいで免疫が下がり、感染症にかかりやすい体になつてしまつた。一日、何も食べず、気持ち悪くて、苦しくて、動けない日々が続いた。

夏の終わりかけ、やつとわたしの体調も元に戻つてきた。少し立つて、歩けるくらいに。そしたら今度は

「見て見て！ 父さんとつくつたんだよ！」

大悟は、まだ声変りをしていない甲高い顔と白くて長い指で、たくさん

のセミの標本を見せてくる。

「えつとね、これがミンミンゼミで、透明の羽のやつがクマゼミ……」

そうやって、意気揚々として話していく姿を見てみると、うれしくつて、でも悲しくつて。気づいたら涙をぽろぽろこぼしてた。

「わたしも、思いつきり、セミ取りしたいよ……。こんな、頭で、ずっとベッドで寝てるなんて、やだよ……」

そう言って、ニット帽をとると、大悟の息を呑む音が聞えた。

「……」

大悟は、標本を胸にかかると、そのまま部屋を出ていった。大悟が置いてくれたセミのぬけがらは、このまにか無くなつていた。

賢治のまちから

高校生☆讀書大賞



その日から、わたしたちの時間は、ぎくしゃくとしたものになつていった。一応、わたしの元気な間は毎日来てくれるんだけど、前みたいに仲良くなげうがら笑い「転げる」とはなくなつた。

そして、秋が來た。

大悟はやつぱり、病氣だつた。

急に、大悟の具合が悪くなつたのだ。「こんな」とは初めてで、わたしはただおろおろするばかりだつた。大悟は、わたしが大変だつたとき、何を考えていたのだろう。

院内ハロウインパーティーでお菓子をもらつたときも、大悟はいなかつた。十一月になつても、大悟が会いに来てくれることはなかつた。わたしは、会いに行こうにも、筋力が落ちて車椅子で移動しなければならないし、感染防止で極力、部屋を出ることは許されなかつた。

そして、全く大悟に会えないまま三度田の治療に入つた。わたしは、また、寝たきりの日々。ときどき、自分が誰か、わからなくなるときだつてある。

気づいたら、夏だつた。一度田の、夏。

わたしが本を読んでいると、大悟がひょっこりと現れた。前と回じようには、セミのぬけがらを手に持つて。

わたしは、また泣いた。

「理音は泣き虫だなあ」

と言ひながら今度は大悟も泣いた。声変わりしかけた、ハスキーな声でお互い、無事で良かった。カツラつきの帽子がとれてしまつとも気にせず、泣いた。そして、大声で笑つた。

でも、そんな日々は長くは続かなかつた。

四度田の、治療。

苦しい、苦しい、もう慣れるかと思つたけど、やつぱり慣れない、でも、大悟はがんばつた。わたしも、がんばらなきや。

……ふと、田が覚めた。何も聞こえない。わたしは死んだのかと思つた。でも違つた。



窓を見ると、田を細めたくなるような快晴のもとで、一匹のセミが飛んでいた。ふりふり、ゅうゆう。そのセミは、窓にぶつかり、ゆっくりと落ちてゆく。そして、ガラスを隔て、大悟のくれたセミのぬけがらの前で、動かなくなつた。

わたしはまた、田をとじた。

わたしは、個室から四人一部屋の大部屋へ移動するとなつた。大学一年生の兄さんと骨髄の型が一致し、移植してもいいことになつたのだ。もう、わたしが何の病氣であるかはとっくにわかつてこね。すぐ、菌が全く入つて来ない無菌室に入れられるはずなのだが、まだ空きがでないのだ。

わたしのベッドは、窓際。ただ何もせず一日中外を眺める日々が続いた。知らない間に秋は過ぎ去つていつていた。

冬になると、隣のベッドに違う人が入つてきた。わたしと同じくらいの男の子。じつと見てたら話しかけてくれた。

「こんちは」

声変わりは、していない。

「……何歳？」

「十一歳です」

「一つ下かあ、入院したばかりなの？」

「はい。あつ、僕、藤澤かえでです」

「わたし、長谷川理音。よろしくね」

その日から、わたしとかえではよく話すようになつた。

ある日、何気なしにかえでが聞いた質問に、答えるまでは。

「理音さんって、こゝ、長いんですよね」

「そうだよ」

「でも、もうすぐ移植だから、あとちょっとですよね」

「そんな、移植してからが大変なんだから」

「え！ そうなんですか。親、全然教えてくれなくて」

「わたしもそう。だから調べた」

「すごい、ぼくはそんな勇氣ないです」

「そんなことないよ。わたしが色々教えてあげる」

「ありがとうございます。お礼と言つてはなんですか？」

「うん」

「理音さんって、セニ、好きですか？」

「……」

「うわ。じつして。

「理音さん?」

「うん、好き、大好き」

「やつた！僕、昆虫採集が趣味だったので、たくさん標本を持つてるんです。親に取つてきてもいいんで、プレゼントしますー。」

「……だった。」

「え？」

もう止める」とはできなかつた。わたしは、また泣いてしまつた。大粒の涙を流して、大声をあげて。

セニ。それは、わたしと大悟を結ぶ、たつた一つの糸。

大悟は、死んだ。もつと早く氣づくべきだつたんだ。セニ取りをしているなら、手があんなに白くはならない。心臓の病気は、外に出て、虫取りなんて、しちゃだめだ。あのとき、言つてあげれば、たつた一言、

「わたし、大悟と話せるだけで樂しいよ」

つて。言つてあげれば、大悟の心臓に負担なんてからなかつたはずなのに。

かえでは、何も悪くない。

でも、それからかえでの顔を見ると、その出来事が思い出されて、話しつくくなつてしまつた。たまに、田が合へばひと言ふた言話すぐらいだつた。でも、かえではしきりに話しかけようとしてくれていた。

そういうしてじる間に、かえでの治療開始日と、わたしの無菌室への移動が決まつた。かえでの治療はわたしが無菌室に移動した翌日にはじまる。

一日だけ、外泊許可が与えられて、わたしは、家に帰つた。家族とたくさん話し、新しい帽子を買ってもりい、おいしそうはんを食べる。中学生になるまでは当たり前だと思つていた田常が、とても幸せだったことに気づいた。



外泊から病院に戻り、いよいよ移動が始まる。わたしは、車椅子でかえでの近くに行き、ひさしひさに話しかけた。

「かえで」

かえでは、驚いていた。そして、につりつと笑ってくれた。

「今まで」「めん」

「いや、そんな辛い」とがあつたなんて、知らず、とんでもない」とを…

…」

かえでの顔をじつと見ても、もう、悲しくならないし、涙も出でしない。「かえでは悪くないよ。話し相手になつてくれて、とてもうれしかつたし。それでね、」

わたしはそのままじつとかえでの前に手をつきました。

「わっ！」

予想どおりの反応に少し氣がよくな。

「これ、あげる」

わたしは、かえでにセミのぬけがらをプレゼントした。大悟の、形見。「無菌室には持つて入れないから、かえでが持つておいてよ」

「いいんですか！？」

「いいよいよ、大切にしてね。」

気づいたら、泣いていた。かえでは、その、クマゼミのぬけがらについて、たくさんのことを話してくれた。本当にひさしふりに、大笑いした。

わたしたちの、さよなりだ。

そしてわたしは、無菌室で入院三度目の春をむかえた。進級祝いをもらつても、何もうれしくない。高校にはちゃんと行けるのか、不安だった。

かえでは今、どうしてるかな。辛い治療で、死にたい、なんて思つてないかな。

そんな日々を過ごし、ついに、夏の初め、骨髄移植が行われた。

その日から、わたしは変わってしまった。



賢治のまちから
高校生☆卒業大賞

ひどい吐き気に襲われ、一日に何回も吐き、感染症にもかかってしまった。おたふくみたいに顔がふくれて、別人のようになってしまった。だれがだれなんてわからない。

苦しい、辛い、助けて、助けて、お父さん、お母さん、兄さん、大悟、かえで、助けてよ。頭の奥で叫び続けた。

あーあ、わたし死ぬのかな、最期ぐらじ、セミみたいに自由に飛びたかつたなあ……。

気づくと体が軽くなっていた。あれ、前も同じようなことがあったな。わたし、今度は本当に死んじゃったのかな。わたしは、空から、病院の無機質な白い壁を眺めていた。あ、これ、死んでんじゃん。よぐりまでがんばつたよ、わたし。

……あれ？ 違う。わたしの体、空にのぼる気配がない。かといつて地獄にいくほど悪いこと、してない。

じゃあ、幽霊になっちゃったの！？

えー、いやだよー！

「シユワシユワ、しゃあしゃあー！」

うそ、わたし、今『おーい！ 誰かーー！』って言つたんだよ。もしかして、と病院の窓に近づく。窓に自分の姿をうつすと、そこにはセミがいた。羽が透明の、クマゼ!!。

「しゃあ！（ええッ！）

わたしは驚きと喜びでとびあがつた。ぐんぐん上昇し、屋上につく。樂しくなつたわたしは、そのまま自由にブンブン飛んでみた。景色が動いてちょっと気持ち悪いけど、体に感じる風が心地よい。

もしかして、あのとき動かなくなつちゃつたセミつて、大悟だったのかもしれない。死ぬ前に、わたしに会いにきててくれたのかな。つてことはわたしも死ぬの？

うれしい気分はつかのま。急に恐怖が体中をかけめぐる。セミになつているはずなのに、悪寒がした。

その前に、もう一度、家族に会いたい……。
「ゴン！」





急に、頭を殴られたような感覚に襲われた。田が覚めると、そこはわたしの家の前。ぼーっとそれを眺めていると、玄関が乱暴に空き、小学六年生の兄さんが飛び出してきた。

「ほり、早くセミ取り行くぞ!」

「お兄ちゃん! ちょっとまってよ!」

毎日聞いていた声。あれは、幼い頃のわたし。その後ろにはお母さんとお父さんもいる。

もしかして、願えば、「行きたい」ところに行けるのかな。
試しに、小六の夏休み、と念じてみた。

すると、

田の前にプールではしゃぎまくるわたしの姿が。どうやら、他の人たちから今のわたしの姿は見えない様だ。

白慢だつた長い髪を一つくくりにして満面の笑みを浮かべるわたし。見ていると、なんだかとても切なくなってきた。

大悟の夏休み、と念じてみる。

田の前には入院中の大悟の姿。大悟のお父さんが、取ってきたセミを渡すと、大悟はそれを大事そうに広げ、

標本にするために針で固定する。そして、お父さんに満面の笑みで
「これを、理音に見せるんだ! それがあかりとの約束」

あかりって誰? ほかほかとあたたまる心に疑問がわく。

あかりさんと大悟、と念じてみると、高校生くらいのお姉さんと、まだ小学生の大悟が楽しそうに話していた。

「これ、おねえちゃんとの、約束ね。男の子は、女の子をしつかり守つてあげるのよ」

「うん!」

そして指切りをする。この病院にはあかりさんという高校生はいなかつたから、もしかすると、亡くなってしまったかもしれない。そして、あかりさんも、セミになつて、大悟に会いに行つたのかな。

それからわたしは、いろんな夏を見て回つた。一度、前の外泊、と念じてみたけれど、どうやら夏にしか飛べないみたいだ。

お母さんとお父さんの夏、友達の美穂と麻衣の夏、好きだった健一君の夏。そしてかえでの、夏。

いろんな夏を見ていくうちに、わたしの心はどうどん壁になつていつた。

生きたい。もっと生きたい。たくさんのことを経験して、いっぱい笑つて、いっぱい泣いて、どんなにつづくてもいいから生きたい。

わたしは、また、泣いていた。セミだから、涙は出ない。でも、心では大泣きしていた。

「理音は泣き虫だなあ」

大悟のセリフがよみがえる。そう、わたしは、泣き虫だ。泣きながら、生きていきたい。

セミは、命の**傳**はがなとの象徴。

長く眠り続け、地上にておよそ一週間で鳥絶える。

わたしはそんな存在になつてしまつたけど、まだ生きたい。

でも、わたしの長い長い夏の旅は、終わりを告げようとしていた。うまく飛べなくなつていた。羽が思うように動かない。少し飛んだだけで、体が重い。

もうすぐ、死ぬのか。こんなに、生きたいつて願つたのに、神様は、とっても非情。

最期にかえでのところに行きたい。

ぱつと景色が変わった。

かえでは、窓際の席に横たわっていた。頬ほおはこけ、とても瘦せていた。窓のサッシには、いつか、わたしがあげたセミのぬけがらが置いてある。

かえでが、うつすらと、目を開けた。その目に、光はなかつた。

わたしは力なく、ふらふらと飛んだ。

わたしが、教えてあげなきや。大丈夫だよつて。乗り越えれば、きっと治るよつて、なぐさめてあげなくちゃ!

生きたい。やつぱり、生きたい! こんなところで、死にたくないが、な
い!

それでも、わたしの体はゆっくりと落ちてゆく。



落ちて、たまるか、死んで、たまるか！
体中の力を羽に込める。でも、体は動かないことを聞いてくれない。
田の前が白くなつてこく。

……そういえば

わたしは、セミになつたいつで、セミになつて自由に飛び回つたいつで思
つた。そしたら、セミになれたんだ。
じゃあ……！

「来年の、夏に行きたい、いや、未来の夏に生きてこる、わたしになりた
い！」

フツと意識がなくなつた。

目が、覚める。いは……。

「あなた！ り、理音が、目を開けた！」

無菌室の外から、お母さんの大声が聞こえた。バタバタといづ音。しづめ
くして看護師さんが入つてきて、カーテンを開けてくれた。

首だけを動かす。そこには、お母さんと、お父さんと、兄さんがいた。
わたし、生きてる……。

乾いているはずの、泣き止らしたはずのわたしの目から、涙がこぼれた。
わたしの顔、ひどいんだろうなあ。これから、わたし、どうなるんだろう
う。

いろんな想いが、わたしの頭をかけめぐる。
でも、大悟、かえで、わたし、生きてるよ。
ちゃんと、息吸つて、泣いて、生きてるよ。

『生きる』という言葉を心でゆづくとかみしめる。
中二の、夏。わたしは、生きてる。



賢治のまちから

高校生☆童話大賞